

硯の裏側 - 遺物整理から -

<http://www.kyoto-ar.c.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

旧尚徳中学校の調査で出土した江戸時代の石製品を整理していたところ、硯の裏面に文字や絵が描かれているものを見つけました。当時の生活様式を知る貴重な資料であるため、さっそく紹介します。

硯は文字を書くための用具です。飛鳥時代に伝来し、奈良時代になると役所の遺跡からは必ず硯が出土します。文書をつかさどる役人は「**刀筆の吏**」と呼ばれました。それほどに硯は役人の必需品だったといえます。

平安京では陶器の硯が多数出土します。風字硯や円面硯などの最初から硯として製作されたもの以外に、須恵器硯や灰釉陶器の椀・皿を利用した転用硯もみられます。陶製の硯では、墨をする面に青海波の文様、外面には叩き文様をつけたものがあり、須恵器硯の特徴が伝統文様として継承されたことがわかります。

ところが鎌倉・室町時代になると、硯の出土量は激減することになります。中世の硯は石製に移行するとされますが、実際の出土品は極めて乏しいのです。

桃山時代に入ると、石製の硯がたくさん出土するようになります。今回の場合も16世紀末の遺構からでした。この期の石硯は、私たちが普段目にする硯とまったく同じです。以後、17～19世紀の遺構か



出土した硯の一部

ら出土し、現代へと受け継がれていきます。

硯の裏面には文字を刻んだものが見られます。内容は人名と石材名ですが、戯画もありました。

人名では、「中村庄右衛門」「上村七工門」「谷口」「荒井氏」「青山」「南」が確認できました。姓を刻んだものが多いことが注目されます。



京(調査地)と高島の位置図



硯に書かれていた石材名 左から「本高嶋上石」「江ノ虎斑石」「あか志ま本石」



硯に書かれていた名前 左から「上村七工門」「谷口」「荒井氏」



硯と砥石の転用品に書かれていた戯画

石材名では「高嶋青石」「本高嶋上石」「高嶋虎斑石」「虎斑石」「あか志ま本石」などがありました。高嶋石は、湖西の高嶋の阿弥陀山で採れる石が硯として最適だったことに由来します。虎斑石はその中での特選品を指すわけですが、斑の字は斑の誤りでした。生産地で誤った字を刻むわけがありません。持ち主が自分で刻んだと考えるのが良いでしょう。その際、高名な高嶋虎斑石と刻むことで高級感を演出したようです。

さて「あか志ま本石」ですが、なにやら「たかしま」に似ています。しかも使用された石材は、中に赤い色脈が走っており、高嶋石と異なることは明らかです。そこで山口県で採れる赤間石にひっかけて「あか志ま本石」と洒落たのではないのでしょうか。

戯画には花や人物を描いたものがありました。梅の花は菅公（菅原道真）にあやかり、文字の上達を願ったのでしょう。人物はイタズラ書きのようで、両手を広げた姿はとてもユーモラスです。

同じく戯画を描いた類例として、建物を描いた砥石が1点出土しました。この砥石には孔が穿たれており、温石（石製のカイロ）に転用されたかもしれません。両面に文様がありますが、一面には入母屋造の大棟に鴟尾あるいは鯨が乗せられた建物が描かれています。

以上、今回は以外なところで貴重な資料が発見されました。今後とも目を皿にして遺物を観察して行きたいと思っています。